



「メモメント」

“MEMENTO” ●●● 第7回

“Now, where was I?”

「さて、どこだっけ？」

妻がレイプ殺人に遭った主人公は記憶を10分しか保てない。が、あきらめずに犯人を追う。映画の時制をバラバラにしてパソコンにも似た記憶のメカニズムを映像化した新世代映画。

文=中野香織



アミューズピクチャーズ配給。全米で「何度も繰り返し見たい映画」と評判になってリピーターが続出、並みいる大作を押さえて全米興行成績8位に。11月からロードショー。

仕事の途中で不覚にも眠り込んでしまい、はっと目覚めたときに「えっと、わたしは何をしようとしていたんだっけ？」と一瞬うろたえた経験はありませんか。あるいは、だいたい話が途中でとんでもない方向に逸れてしまい、はっと気づいて「えっと、どこまで話しましたっけ？」とまごついた経験は。その感覚を英語で言えば、こうなります。

Now, where was I?

字義どおり、「さて、どこだっけ？」の感覚ですが、今回紹介いたします映画、『メモメント』を貫く感覚こそまさにこれです。なんとといっても、主人公レナード(ガイ・ピアース)は記憶を10分しかとどめておけません。拳銃をもった男とらみ合って走りながらも、そいつを追っているのかそいつに追われているのかすら忘れてしまうほどの重症です。愛する妻をレイプされて殺されたショックの後遺症で、前向き健忘という記憶障害にかかってしまったからです。

この作品は「こんな映画、見たことない!」という興奮を与えてくれます。それは、短期記憶障害のハンデを負った主人公が妻殺しの犯人探しをするというストーリーが新鮮だからではありません。数分前の記憶をたえず失いながらも「目的」に向かって行動しつづければならないレナードの感覚を、そのまま観客に追体験させるかのような大胆な形式こそが、斬新な知的スリルを与えてくれるのです。

映画の各シーンはいつも唐突に始まります。直前にはいったい何が起こっていたのか? おれはいったい何をしようとしていたのか? レナードにとってはおなじみの、“Now, where

was I?”から始まる世界です。自分の存在基盤があやふやになるこんな感覚世界を、観客も一緒に生きなければならない。とはいえ、観客には映画の時間がすすむにつれて、少しずつ「直前の世界」が明らかにされていきます。結果、まるでビデオをちびりちびりと巻き戻して見せられるような感じで、物語の全体像が次第に明らかになっていくのです。全く新しいサスペンスを観客に「体験」させることに成功した監督はクリストファー・ノーラン、31歳。サンダンスはじめ各地の映画祭で最優秀脚本賞を受賞した完成度の高い脚本も、ノーラン自身によるものです。

さて、タイトルの *memento* ですが、原義は、“remember thou”、すなわち、「汝、忘れるなかれ」です。現代では「思い出の品」や「警告」の意味をもつ名詞として使われていますが、その心は「忘れてはならないことを思い出させるよすが」であります。ちなみに、“*memento mori*” といえば、おごり高ぶりがちな人間に対する「汝、死を忘れるなかれ」という警告のことで、ドクロなどの死の表徴を指します。

記憶を新しく作ることができないレナードは、自分の身体にメモメントを刻みます。真相への手がかりを身体にタトゥーとして彫るのです。知り合った人間はポラロイド写真に撮ってメモし、確認を繰り返す。記憶作りのための滑稽なほどの行為を観ながら、わたしたちはふっと理解します。刻まれた「記憶」こそが人間のアイデンティティのよりどころとなり、行動の方向を決定する基盤となることを。レナードがこんなセリフを言います。

We all need memories to remind ourselves who we are.
I'm no different.

(記憶は自分の確認のためなんだ。みんなそうさ。)

では、記憶とは何でしょう。誰よりも「真実の記憶」を渴望するレナード自身さえ、自分の身体にこんなタトゥーを彫っているのです(スクリーンに一瞬、映しだされるので、しかとご確認ください)。

Memory is treachery.

(記憶とは、当てにならないものだ)

「当てにならない」記憶が作るミステリーが解明されるにつれて、人間にとっての記憶という、いっそう複雑なミステリーが浮かび上がってきます。そう、この低予算映画が不思議な重量感をもって心にひっかかるのは、こんな哲学的なおいのする問題をつきつけられるからにほかなりません。健常者であるわたしたちでも、ひよっとしたら気に入った「事実」だけをメモメントとして選び、繰り返し自分に語り聞かせて記憶していることがあるのかもしれない。しかも、気に入られなかった「事実」はきれいに消滅するわけではなく、ねじれ、ゆがんだ形で別の「事実」のなかに紛れ込み、新たな「事実」に姿を変えて生き残っているのかもしれない。そんな不気味で不確かな記憶の蓄積がアイデンティティとなり、行動を決定しているのだとしたら……!?

そこまで考えて背筋がぞくぞくとした瞬間、レナードの最後のセリフが決まります。“Now, where was I?”この時にはもう、観客自身のセリフになっています。